

はじめに

京都大学防災研究所

地震予知研究センター 梅田康弘

1995年の兵庫県南部地震のあと、それまで独立に運用していた大学と気象庁の高感度地震観測データの交換が始まった。その後、防災科学技術研究所の高感度地震観測網のデータの一部が管区气象台を通して大学に配信されるようになった。平成13年度末からは、3機関の高感度地震観測データは、つくばのデータセンターに集められた後、まとめて配信されるシステムになり、大学は衛星通信で全国の必要なデータを任意に受信出来るようになった。

異なった機関のデータを交換することは、そう簡単ではない。解決しなければならない様々な問題が発生する。関係機関の連携協力は当然であるが、なんといっても現場の担当者や技術者のお互いの理解と信頼関係が必要不可欠である。幸い、このデータ交換が始まった当時、大阪管区气象台の黒磯章夫地震情報官の呼びかけで、技術的な打ち合わせ会が持たれ、この困難な作業が成功した。その会合を「官と学」をもじって「カンカンガクガクの会」と名付けられたと聞いている。最近では民間も加わって「官民学の会」とも呼ばれ、京都や和歌山で年1回の情報交換会が開かれている。平成13年度は、前年に起こった鳥取県西部地震に関連した研究集会が米子市で開かれた事もあり、この会が米子市のコンベンションセンターで開催された。大阪管区气象台からは最近の同管区でのデータ処理量が、これまでの京大防災研地震予知研究センターでの処理量を超えつつあることが報告された。このような報告を受け、当センターでは今年から読みとり処理を縮小し、管区の処理データを利用させてもらうことにした。発表の内容も、データ交換に関する技術的な情報交換の場から、成果や研究に関する情報交換の場に発展しつつあるように見える。これからはますます「官民学」の連携を深めて、地震研究の進歩に寄与する会にしていきたい。